

すまいるたん



汐入

第146号
平成22年
6月23日



ジョイフル三ノ輪商店街の「ナガオカ」の五十嵐春雄さん（大正14〜平成19）の遺稿集「三ノ輪界わい名跡散歩」平成五年十二月より

浄閑寺は荒川区南千住二丁目八番地にある。東京には上野寛永寺・芝増上寺・築地本願寺等、数々の名刹がある。然し、それらの有名の寺院には悲情の念は一つも起らない。通称「投げ込み寺」といわれ又「箕輪の無縁寺」と称せられた浄閑寺は他の名刹とはその規模等に於いては劣るが、歴史書・講談・落語等によって勝るとも劣らない有名寺である。それで長くなるのであるが、浄閑寺に就いて述べてみよう。正しくは「栄法山清光院浄閑寺」というが通称は「三輪山浄閑寺」である。

開創は明暦元年（一六五五）新吉原開設に先だつこと二年であつた。開山は天蓮秋晴上人随行順波大和尚となつてゐる。過去帳によれば晴誉順波は「生国奥州あいず若松梶川五十三才卒」とあり、没年は「寛永元年丑二月廿九日（一六六一）」と記されている。

はじめは、増上寺の末寺であつたが、いまは知恩院に属している。元文二年（一七三七）下谷八軒町より出火し上野広小路・東叔山・坂本・金杉・三ノ輪一帯之延焼し

た記録に残る大火があつた。浄閑寺は灰燼に帰し、この災禍から五年はその間大洪水をも伴つて浄閑寺にとつて一種の危機であつたともいえよう。これを立て直したのが十一世常誉上人で現在の過去帳もこの代から改めて起筆されている。浄閑寺をつとに名をなさしめた重要な人物がいる。それは小説家永井荷風である。荷風が「堂宇朽廃し墓地も荒れ果てゝいた」と書いた明治廿一、二年頃は改修直前の最も荒廃していた時であつた。



荷風碑

いま浄閑寺界隈に暗澹たる印象を探ることはできない。「寺の小笹の茂り多き垣を取り巻いて」と荷風は書いてあるが流れていたという小流は音無川であるが、今は暗渠となつて風情なき舗装道路と

化し三ノ輪橋の欄干の名残が、ただ一日本日光街道の傍にひっそりとたつてゐるにすぎない。荷風はその後三十余年間、ついで浄閑寺をおとずれることはなかつた。

次の訪問は昭和十二年六月「断腸亭日乗」に詳しい記事が見られる。荷風は前年九月二十日に生涯の傑作といわれる「ぼく東綺譚」を起稿し、十月二十五日に脱稿、翌十二年四月十五日から六月十四日にわたつて東京・大阪両旭新聞の夕刊第一面に連載された。この作は連載中より、すでに世上の好評を博し、荷風の文名はとみにあがつた。このぼく東綺譚の想にかられ、昭和十二年六月廿二日三十余年振りに浄閑寺を訪れるのである。荷風は

この日、やがてわが生を終わる時にあわれな遊女達の眠る草むす墓域に、ともに骸を埋めようと思ひ立ったのである。荷風が最後に浄閑寺を訪ねたのは昭和廿一年一月十八日であつた。その時の山門の写真を見るとダンディな服装であるが、その以後の荷風はヨレヨレの背広に下駄を履き、風呂敷を片手に持ち歩く姿や浅草ロック座のストリップパー五、六人を囲んで撮つた写真が新聞紙、週刊紙上に載つたことを知っている人も多いであろう。



新吉原総霊塔

しかし、昭和三十四年四月三十日、八十歳を以て孤独な死を遂げたのである。荷風は浄閑寺に骨を埋める予定であつたが、それもかなわず雑司が谷の永井家の墓地に葬られた。昭和三十八年五月十八日、荷風文学愛好の発起人達によつて浄閑寺内、新吉原総霊塔に向う一角に「荷風碑」が建立された。

浄閑寺には一般住民の他に遊女・心中者・相對死（生き残つた者は死罪）又、客引き役であつた男衆の妓夫太郎（牛とも及とも云う）もここに埋められている。浄閑寺は吉原の楼主達の檀那寺ではない。取るに足らぬ、あわれな遊女達の無縁墓が境内の一部を占めていたところである。それらの無縁墓は昭和四年に至つて石垣造りの「新吉原総霊塔の下」に括して納められたのである。浄閑寺について少し長くなつてしまつたが、お許しの程を。